

韻律接中辞と左接性

—日本語オノマトペの強調語形成—

那 須 昭 夫

1. はじめに

接中辞は、その他のタイプの接辞（接頭辞や接尾辞）とは異なる性質を備えている。接頭辞や接尾辞が線形的な配置でベース（基体）と結合するのに対して、接中辞は非線形的な語形成を起こし、その位置の決まり方は種々の韻律的な条件によって制御されていることが多い。接中辞による語形成は概して韻律依存的な性格を含むが、この特徴は汎言語的に観察されるものであると同時に（McCarthy and Prince 1996）、一般の接辞との違いとして注目すべき特徴でもある。

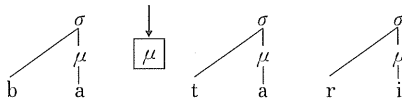
本稿では、日本語における接中辞の特性を観察し、語形成における接中辞の位置が領域左端部への近接性（左接性）ならびに音節構造の適格性の二つの韻律的な要求によって制御されていることを明らかにする。接中辞が関わる語形成として、本稿ではオノマトペにおける強調形を分析対象に取り上げる¹⁾。

(1) オノマトペ

バツタリ、ポッカリ、ドッシン、パッチン、グンニヤリ、ザンブリ、フンワリ、
ジンワリ

2音節の語幹に接尾辞がついた形をベースとして派生される強調形では、促音ないしは撥音が強調のマーカ―として語中に挿入される。促音・撥音は、後続音節の頭子音が先行音節末尾のモーラと連結関係を構成することによって作られる韻律的な構造であることから（Itô 1986, Hayes 1989）、強調語形成では韻律範疇のひとつであるモーラが接中辞として働いていると考えられる。すなわち強調形はベースの内部に韻律接中辞の μ が挿入されることによって作られる。

(2) 韻律接中辞 μ



韻律接中辞として働くモーラ（以下「接中辞 μ 」）は素性指定を持たない純粋に韻律的な接辞で、その音韻指定は前後の環境に依存して決まる（Lombardi and McCarthy 1991）。問題は、このモーラがベースの韻律構造にどのように組み込まれるか——すなわち、 μ の音節化がどのようなしくみで起きているかである。

本稿では接中辞 μ が音節構造に組織される際に働く文法について考察し、自律分節理論における走査と連結のモデルに基づいて、 μ の着地点が領域の「左から右」にかけて走査されることおよび、可能な限り領域の左端に近い位置に μ が挿入されることを論じる。これらの特徴は左端部への近接性（Left-edge proximity, 以下「左接性」）と呼ばれ、接中辞を伴う語形成において汎言語的に観察される効果であるが（McCarthy and Prince 1993）、本稿ではこの効果が日本語にも生じていることを明らかにする。

2. 音節化をめぐる問題

はじめに、言語事実および先行研究を振り返りながら本稿における問題の所在を明らかにしておきたい。強調形の形成過程では、以下に示すように接中辞 μ の具現形である促音・撥音がベースの第1音節の末尾に入る。

(3) 強調形

| | | | | | | | |
|-----------|---|------------|--------|------------|---|-------------|---------|
| ba.ta.ri. | → | bat.ta.ri. | （バツタリ） | gu.nya.ri. | → | guN.nya.ri. | （ゲンニヤリ） |
| po.ka.ri. | → | pok.ka.ri. | （ポッカリ） | za.bu.ri. | → | zaN.bu.ri. | （ザンブリ） |
| do.siN. | → | dos.siN. | （ドッシン） | hu.wa.ri. | → | huN.wa.ri. | （フンワリ） |
| pa.tiN. | → | pat.tiN. | （パッチン） | zi.wa.ri. | → | ziN.wa.ri. | （ジンワリ） |

接中辞 μ の位置は常に第1音節の末尾に一定しているが、この点についてTateishi (1989)では以下のような分析が示されている。

Tateishiは日本語における二項フット（bimoraic foot）の存在を論証する過程でこの現象を取り上げ、第1音節の末尾（Tateishiの表現では「語末から3モーラ目の位置」）に接中辞が加わることによって適格なフット構造がもたらされると述べている。「バタリ→バツタリ」を例に採ると、ベースである「バタリ」では語末から二項フットが解析される結果(4a)のような韻律構造が作られるが、この構造では語頭音節がフットに組織されておらず安定性に乏しい。一方、語末から3モーラ目の位置に重子音構造が生じた「バツタリ」では、語頭の音節がフットに組織されることにより(4b)のような安定した韻律構造が得られる。

(4) フット構造 (() はフット)

| | | | |
|----|--------------|-------------|-------|
| a. | σ + F | ba.(ta.ri.) | （バタリ） |
|----|--------------|-------------|-------|

b. F + F (bat.)(ta.ri) (バツタリ)

すなわち、次々末位置に強調のモーラが挿入されることによって全ての範疇がもれなく二項フットに組織され、適格で安定したフット構造がもたらされる²⁾。

上述の分析は二項フットの実在を論じる上では有効であり説得力がある。しかし、オノマトペの言語事実に照らすとこの説明だけでは解けない問題が残る。次々末位置へのモーラの挿入によってフット構造の適格性が保証されるのであれば、次のような長母音を含む強調形式もその要求を満たすはずである。長母音を含む形式でも第1音節に含まれるモーラが二項フットを構成でき、結果的に(4b)と同様の韻律構造が得られるからである。

(5) 長母音形 (() はフット)

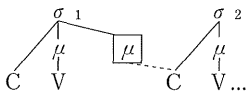
- | | |
|---------------------|-----------------------|
| *バータリ (baa.)(ta.ri) | *ゲーニャリ (guu.)(ny.ri.) |
| *ポーカリ (poo.)(ka.ri) | *ザープリ (zaa.)(bu.ri) |
| *ドーシン (doo.)(siN.) | *フーワリ (huu.)(wa.ri) |
| *パーチン (paa.)(tiN.) | *ジューワリ (zii.)(wa.ri) |

しかしながら、オノマトペの強調形として(5)のようなパターンは現れない³⁾。このことは、単に二項フット構造の適格性(ないしは安定性)のみがこの語形成を統御しているわけではないこと——換言すると、強調によって第1音節を軽音節から重音節に変えるだけでなく、音節の内部構造にも一定の制限が加わっていることを意味している。

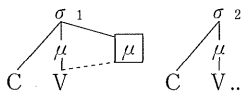
ここで留意したいのは、上述の問題が音節化のあり方と深く関わる性質を持っているということである。ベースの第1音節と第2音節の間に挿入された接中辞 μ が音節に組織される際には、論理的に以下に示す二通りの可能性がある。

(6) 音節化

a. 重子音



b. 長母音



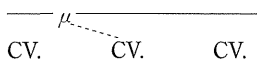
ひとつは、 μ が第1音節(σ_1)に組織されると同時に第2音節(σ_2)の頭子音とも連結関係をなす重子音構造(6a)である。もうひとつは、第1音節の核母音が接中辞のモーラと連結して長母音を形成する構造(6b)である。ただし、言語事実(3)(5)に照らすと実際の強調形式として現れるのは重子音構造(「バツタリ」)であり、長母音構造(「*バータリ」)は起こらない。すなわち、 μ の音節化には二通りの可能性がありながらも実際には重子音構造のみが適格とされるわけだが、こうした非対称性がどのように説明されるの

か考える必要がある。

3. 走査・連結・認可

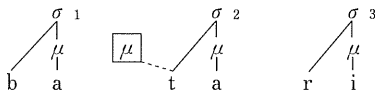
音節化のプロセスにおける(6a)と(6b)の決定的な違いは、接中辞 μ がどの分節と連結関係を持つかという点に求められる。より具体的には、 μ がその直後の音節の頭子音と連結関係を持つこと(= 6a)こそが、このプロセスを特徴づける顕著な性質である。いわば、強調語形成とは接中辞 μ をベース内のいずれかのCスロットと連結する過程であり、その様子は次の自律分節構造で捉えられる。

(7) 走査と連結



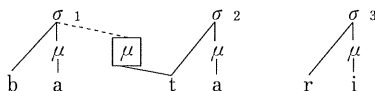
接中辞 μ は韻律層に属する自律分節形態素であり、これが分節層に属する子音スロット(C)と連結するところから強調構造の韻律形成が始まる。「バッタリ」を例にとると、 μ が対象の子音と連結したときの韻律構造は次のように示せる。

(8) 「バッタリ」



ところで、ある韻律範疇が構造に現れる時には常に他の範疇から適正に認可されなければならないが(Steriade 1982, Itô 1986, 1989)、この規約に従うと、(8)の構造では子音と連結した μ の認可のあり方が問題になってくる。 μ はいずれかの音節節点と連結関係を持たねばならず、仮に適正な連結が構成されないと出力解釈を受けることができない(遊離要素削除)。(8)の構造で浮いている μ が適正に認可されるためには、その方法は一つしか残されていない。すなわち(9)に図示するように、第1音節(σ_1)に組織されることだけが唯一適格な音節化である。

(9) 「バッタリ」



第1音節以外の音節節点が μ を組織することはできない。たとえば第3音節が μ を組織

しようとする、連結線交差禁止制約 (Line-Crossing Ban : LCB) に抵触する構造が作られてしまう。また第 2 音節が自ら μ を組織すると頭子音が重さを担うことになり、これまた適格な構造とは言えない (Itô 1986, Hayes 1989)。このため、浮いた μ を組織できるのは第 1 音節に限られ、その結果重子音構造 (9) が形成される。

以上の分析に基づく、オノマトペの強調形に関してはまず接中辞 μ が連結対象の子音を走査し、これとの連結関係が構成された後に、第 1 音節が μ を認可することで語形成が達成されるという一連の流れを捉えることができる。

(10) 語形成

- a. 走査 接中辞 μ は連結対象を走査する。
- b. 連結 μ は子音に対して連結する。
- c. 認可 μ は第 1 音節に組織されることで韻律的に認可される。

ただし、この説明は単に言語事実を記述的にまとめたに過ぎず、未だ解消されていない疑問も残されている。その疑問の第一は、なぜ接中辞 μ が連結対象として子音だけを排他的に選ぶのかということである。また第二の疑問として指摘できるのは、 μ が 2 番目の子音に連結するのはなぜかということである。そこで以下ではこの二つの疑問を足がかりに更なる考察を進めてゆく。

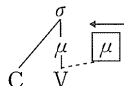
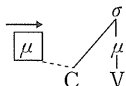
4. 左接パラメータ

はじめに第一の疑問——接中辞 μ が子音だけを結合対象として選ぶ理由について考える。ここでまず注目したいのは、以下に述べる接中辞 μ の音韻論的な性質である。

μ は、形態論的なレベルではベースの〈内部〉に〈挿入〉される性質を持っていても、音韻論的なレベルでは音節の〈周縁部〉に〈結合〉する性質を持っている。と言うのも、CV 音節に対して μ が新たに添加される場合、その位置の可能性は音節の左端ないしは右端のいずれかに限られるからである。

(11) 方向

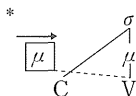
- a. 左から右 (左接構造)
- b. 右から左 (右接構造)



左端に結合する場合はその対象が子音に限られ (= 11a)、右端に結合する場合は母音との結合だけが許される (= 11b)。殊に(11a)の場合には、 μ はさらにその直前の音節に認可されることで重子音構造を形成する (→ 9)。

μ の位置および結合対象にこうした限定的な対応関係が生じるのは、自律分節構造における一般的な制約である LCB がその動機となっている。すなわち、 μ と分節を結ぶ連結線が他の連結線と一切交差していないことがこの場合重要な特徴である。(11)においては μ と分節を結ぶ連結線が他の連結線と一切交差しないが、それ以外の構造——たとえば、左から V に連結する構造や右から C に連結する構造——では必ず連結線の交差が生じてしまう⁴⁾。

(12) LCB 違反



接中辞の μ は音節の周縁部にしか結合できない——すなわち音韻論的な構造では接頭辞ないしは接尾辞のいずれかのパターンしか持たず、重子音形成に至る(11a)では μ は音韻論的な意味での接頭辞に相当し(左接構造)、長母音形成に至る(11b)では音韻論的な接尾辞に当たる(右接構造)。

ここで言語事実を振り返ると、オノマトペの強調形において可能なパターンは(11a)に限られるわけだが、このことは、接中辞 μ が「左から右へ」という一定の方向性を以って語形成に参加していることを物語っている。また、子音だけが μ の連結対象として選ばれるのは接中辞 μ に次の特性が備わっているからだと考えられる⁵⁾。

(13) 左接パラメータ

- a. 走査方向 接中辞 μ は、ベースの「左から右」に向かって対象を走査する。
- b. 連結対象 接中辞 μ は、最初に出会った(＝最も左の)分節に結合する。

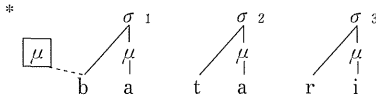
これを「左接」パラメータと呼ぶのは、走査・連結のいずれの過程に関しても常に構造の「左」の位置が起点(走査)ないしは着点(連結)として働いているからである。上に述べたように、 μ が重子音のモーラとして音節化される場合には「左から右へ」という連結方向だけが適格であるが、このパラメータの下では μ は常に子音としか連結できない。仮に(13a)がアクティブな状態で μ が母音と連結してしまうと、(12)のような違反構造が生じる。すなわち、強調語形成において接中辞 μ が子音だけを唯一の対象として連結するのは、 μ の特性として左接パラメータ(13)が備わっているからだと分析できる。接中辞 μ は、いわば音韻論的には接頭辞に比類すべき振る舞いを見せているのである。

5. 不可視効果と音節構造

ところで上の分析に問題が残るとすれば、それは先に第3節で「第二の疑問」として

述べたことであろう。「最初に出会った分節」を連結対象に指定する(13b)に従えば、接中辞 μ はベースの先頭の子音と連結するはずである。「バタリ」を例に、 μ が語頭子音と結合した状態を(14)に図示する。

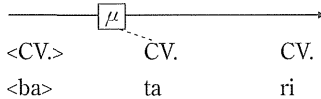
(14) * bbatari



しかしながら、実際には語頭の子音に μ が連結する構造は起こらず、(9)に示したようにベースの2番目の子音と連結して重子音構造が形成される。つまり第1音節の子音は走査の過程で飛ばされてしまうわけだが、この点についてはどのように考えたらよいだろうか。

この問題は、生成音韻論で一時期議論された「不可視性」(ないしは韻律外性(extrametricity))の概念によって捉えることができる。つまり、 μ が連結対象を走査する際に、ベースの第1音節は「見えていない状態」にあると考えるのである。以下に図示するように、ベースの第1音節が不可視なのであれば、 μ が最初に出会う分節は第2音節の頭子音をおいてほかにはない。

(15) 第1音節の不可視性 (< >はその要素が不可視であることを示す。)



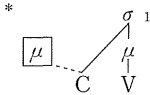
第1音節 <CV> は不可視であるので、接中辞 μ はこれを走査することができず、結果的にその右側にある残りの構造 /CV.CV./ の中に連結対象を求めざるを得ない。連結に際しては(13b)が働くので、残りの構造の先頭の分節——すなわちベースの第2子音が連結対象として選択される。

ところで、不可視性(ないしは韻律外化)の概念は派生理論の枠組みにおける説明装置の一つとして長らく論じられてきたものだが、不可視性を仮定することによって言語事実の説明はなされても、これを仮定する動機については長らく定かでなかった。だが、近年では制約に基づく音韻理論においてこの点の検証が進められており、たとえば Kubozono (1997) は、複合語アクセントに見られる語末不可視性(Poser 1990)が語末フットの頂点化を忌避する普遍的な制約の効果のもとに生じるものであることを明らかにしている。こうした再検証の流れに則って考えると、上に述べた語頭音節の不可視性に関しても一定の動機を求めることができる。

語頭音節における不可視効果には、音節構造の適格性がその動機として関わってい

る。強調語形成のようにモーラを音節構造に組み込むタイプの音韻過程では、構造の先頭に位置する音節は極めて特殊な地位にある。なぜなら、接中辞の μ が第 1 音節の頭子音に付加された(14)のような構造に限っては、浮いている μ を認可できる音節節点とその左側に存在しないからである。

(16) 先頭音節への μ 付加 (= 14)



すなわち、領域先頭の音節は μ を付加する対象として本質的にふさわしくない。この音節に対して μ を付加する作用は(16)のような認可不能な構造を作り出す結果になってしまう。語頭音節において不可視効果が生じるのは、上述のように μ をこの音節に組織する操作が常に非文法的な構造の生成につながるからにほかならない。不適格な構造を作り出さないことが文法知識の根本的な性質であることを鑑みると、語頭音節はいわば「禁断の地」なのであり、それゆえにこの音節には他の音節にはない特性として不可視効果が伴うのである。

6. 左接構造の一般性

これまでの議論を通じて、オノマトペの接中辞 μ には構造の左端部に対してとりわけ敏感な性質が備わっていることが明らかになったが、本節ではこうした左接性が多くの言語において一般的に観察される特徴であることを論じる。

6.1 接頭辞の亜種としての接中辞 μ

左接性は、接中辞に関して汎言語的に観察される特徴の一つである。韻律形態論の枠組みで従来示されている知見によれば、接中辞は必ずしも独立の形態論的範疇をなすわけではなく、語形成のモードにおいてはむしろ接頭辞と極めてよく似た特徴を示すことがあるとされる (McCarthy and Prince 1996)⁶⁾。一例として、タガログ語 (Tagalog) の接中辞-*um*-の現れ方について見てみよう (McCarthy and Prince 1993)。

(17) タガログ語

| | | |
|---------|-------------|------------|
| ベース | 派生形 | |
| gradwet | gr-um-adwet | 'graduate' |
| sulat | s-um-ulat | 'write' |
| aral | um-aral | 'teach' |

-um- は可能な限りベースの左端に近い位置に現れることから、接頭辞に比類すべき性質を認めることができる。特に母音で始まるベースでは接頭辞と全く同様に語頭位置に付加される。

具体的な語彙形態素ではなく、韻律範疇が接中辞として働くタイプの言語においても同様な左接性が観察される。その一例としてフィリピン諸語の一つであるケレイイ語 (Keley-i) の現象を見る (Hohulin and Kenstowicz 1979, Samek-Lodovici 1994)。

(18) ケレイイ語

| ベース | 派生形 | |
|-------------|-------------|-----------------------|
| pi.li.ʔen. | pi.li.ʔen. | 'to choose, OBJ. F' |
| du.ya9.ʔen. | du.ya9.ʔen. | 'to pour, OBJ. F' |
| ʔi.pi.li. | ʔip.pi.li. | 'to choose, ACCES. F' |
| ʔi.du.ya9. | ʔid.du.ya9. | 'to pour, ACCES. F' |

ケレイイ語ではモーラが接中辞として働き、その具体的な音形は直後の分節の種類に依存して決まる。この現象などは日本語オノマトベの強調語形成とまさしく瓜二つである。まず、モーラが接中辞として働いている点が共通しており、加えてその位置が常にベースの最も左に位置する軽音節の末尾に一定している点も全く同じである。

さらに、日本語の中に限って観察しても、本稿で検証してきたものと同様な左接現象は他にも容易に探し当てることができる。その一つとしてまず指摘できるのは、和語に生じる強調語形成である。

(19) 左接現象 (和語強調形)

| | | | |
|-----------|---|------------|-----------|
| ba.ka.ri. | → | bak.ka.ri. | (～ばっかり) |
| to.te.mo. | → | tot.te.mo. | (とつても) |
| de.kai. | → | dek.kai. | (でっかい) |
| ya.ha.ri. | → | yap.pa.ri. | (やっぱり) |
| a.ma.ri. | → | aN.ma.ri. | (あんまり) |
| ta.bi. | → | taN.bi. | (たんび (度)) |
| o.na.zi. | → | oN.na.zi. | (おんなじ) |

これもモーラが接中辞として挿入される点でオノマトベの強調語形成と同じ性質を備えた現象である。また第1音節と第2音節の間に接中辞のモーラが入り、それが第1音節の末尾子音として組織される点もオノマトベの強調形と全く同じ振る舞いである。

この現象からは、これまで論じてきた接中辞 μ の左接性がオノマトベに限って見られる性質なのではなく、むしろ日本語全般に通じる性質であることが分かる。和語においてもオノマトベにおいても、接中辞 μ にはベースの左端から右側に向かって結合対象の

子音を走査する性質が見られるとともに、不可視状態にある第1音節を除く残りの構造の先頭に接中辞 μ が結合する点も同様である。不可視な語頭音節を除いてみると、 μ が接頭辞と同じ左接的なモードを有している様子をはっきりと捉えられる。

(20) 接中辞 μ の左接性 (<> は不可視音節)

a. オノマトペ

<ba.>ta.ri. ...t-tari (バツタリ)

<po.>ka.ri. ...k-kari (ポッカリ)

<do.>siN. ...s-siN (ドッシン)

<do.>kaN. ...k-kaN (ドッカン)

b. 和語

<ba.>ka.ri. ...k-kari (ぼっかり)

<to.>te.mo. ...t-temo (とつても)

<de.>kai. ...k-kai (でっかい)

<ya.>ha.ri. ...p-pari (やっぱり)

この事実からは、語種の違いを問わず接中辞 μ には接頭辞に比類すべき性質——左接性が備わっていることが分かる。殊に、 μ が可視構造（語頭音節を除いた残りの構造）の左端に結合していることから、タガログ語やケレイイ語の接中辞と同様に、日本語におけるこれらの現象においても接中辞 μ が接頭辞の亜種としての位置づけを持つことが分かる。

6.2 音節構造の有標性

左接現象は、このほかにも反復形オノマトペの強調形式（反復強調形）にその存在を認めることができる。反復強調形の場合、本稿で見てきた接辞強調形（例「バツタリ」など）と比べると接中辞 μ の入る位置の制限が比較的緩やかだという特徴がある（那須 1999a, 2002）。たとえば「ピカピカ（に）」からは「ピッカピカ」だけでなく「ピカッピカ」という形式も生成できる。しかしながら、那須（1999a）の統計的な分析によれば、特別な音配列上の有標性が伴わない限り前者のパターンが作られやすいことが明らかにされている。

(21) 左接現象（反復強調形）

a. HLLL 型

| |
|---------------|
| pik.ka.pi.ka. |
| kas.sa.ka.sa. |
| kut.ta.ku.ta. |
| suk.ka.su.ka. |

>

b. LHLL 型

| |
|---------------|
| pi.kap.pi.ka. |
| ka.sak.ka.sa. |
| ku.tak.ku.ta. |
| su.kas.su.ka. |

>

c. *LLHL

| |
|----------------|
| *pi.ka.pik.ka. |
| *ka.sa.kas.sa. |
| *ku.ta.kut.ta. |
| *su.ka.suk.ka. |

接中辞 μ が付加された音節は重くなるが、そのような重音節が左端に生じる構造ほど好まれやすい。たとえば「ピカピカ」から派生される強調形では左端の重音節に接中辞 μ を含む「ピッカピカ（HLLL 構造）」が最も生成されやすく、それに比べると「ピカッピカ（LHLL 構造）」はやや生成されにくい。さらに「*ピカッピカ（*LLHL 構造）」のよ

うに接中辞 μ が著しく右寄りの位置に連結した形式は適格性そのものを失ってしまう(那須 1999a)。この事実も、接中辞 μ がベースの左端から右方向にかけて結合対象を走査する特性を備えていることを裏付けている。

興味深いことに、重音節が構造の左端の位置に生じる連鎖は日本語において無標なパターンであることが知られている。このことは短縮語や倒位語の形成過程 (Itô 1990, Itô, Kitagawa and Mester 1996) や母親語の形態構造 (窪蘭 1995) など、強調以外の諸現象を通じて従来明らかにされてきた。

(22) 音節構造の有標性

(無標) HL > LH (有標)

音節構造の有標性の観点から見ると、接中辞 μ にまつわる左接性には、無標な音節構造を作り出す効果が備わっていると述べることができる。この点は接辞強調形ならびに和語の強調形においても同様である。接辞強調形については「*バタッリ、*ザブンリ」といった不適格な形式がおしなべて語の左端に LH 構造を備えていることから確かめられる。また和語の強調形については、有標な分節が含まれない限り HL 構造ではじまる強調形が作られやすいことが富山ほか (2001) によって報告されている⁷⁾。

7. まとめと補足

本稿では日本語オノマトペの強調語形成に参与する接中辞 μ の音韻特性について考察し、以下の点を明らかにした。まず、接中辞 μ はベースの左端から右側に向かって連結対象を走査し、最も左に位置する子音と結合する性質を持つ。本稿ではこの特性を左接パラメータ (13) として一般化した。また、接中辞 μ がベースに連結する際に構造の先頭の音節が不可視的な振る舞いを見せることを明らかにし、この不可視性が、音節構造の適格性に関わる一般的な制約によって動機づけられるものであることを論じた。さらに、左接性が接中辞に関して汎言語的に観察される一般的な特性であることを示しつつ、接中辞 μ が接頭辞の亜種として捉えられることを論じた。本稿では主に接辞形オノマトペでの強調構造について考察してきたが、反復形オノマトペや和語での強調現象においても接中辞 μ が同様の振る舞いで働くことから、接中辞 μ に見られる左接性は、ベースとなる形態素の種類の違いを問わず、日本語全般にわたる特性であると考えられる⁸⁾。

以上が本稿の議論の帰結であるが、最後に (10b) で述べた記述の事実に関して補足の議論を付しておきたい。接中辞 μ が専ら子音スロットと結合することに関して、本稿では音節構造の適格性 (LCB 制約) の観点からの説明を試みたが (第 4 節)、以下に指摘する現象は、この説明を支える傍証となり得る。和語形容詞では接頭辞「ま (真)」の結合による強調語形成がある。その際、形態素境界に特殊モーラが挿入されることがあるが (例:「真っ白」)、母音で始まるベースに前接する場合に限っては母音削除ないしは子

音挿入のプロセスが余分に伴う。

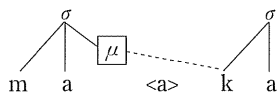
(23) 「まっ (真)」

- a. 母音削除 $ma + \mu + aka \rightarrow ma + \mu + \langle a \rangle ka : makka$ (真っ赤)
 b. 子音挿入 $ma + \mu + ao \rightarrow ma + \mu + [s]ao : massao$ (真っ青)

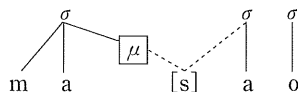
削除と挿入は互いに正反対の方向性を持つプロセスだが、この現象においてはどちらも共通のゴールをもたらす働きを演じている。そのゴールとは接中辞 μ を子音と結合させることである。「真っ赤」ではベース先頭の /a/ を削除することで μ と子音 /k/ との結合を実現し、「真っ青」では形態素境界に挿入子音 /s/ を入れることでこの子音と μ との連結がもたらされている。

(24) 子音との結合

a. 削除 (真っ赤)



b. 挿入 (真っ青)



論理的には、ベース先頭の母音が μ に拡張した / *maa-aka (*まー赤)、*maa-ao (*まー青) / も可能なわけだが、こうした形が起こらない代わりに削除・挿入といった特殊なパターンが生じることからは、接中辞 μ の結合対象として子音が積極的に好まれている様子を垣間見ることができる⁹⁾。

付記

本稿は、科学研究費補助金の助成を受けた研究課題「プロソディーの多様性と普遍性に関する総合的研究」(基盤研究 (B) (1)、課題番号 14310222) の成果の一部をまとめたものである。

注

- 1) オノマトベの強調形には、語幹に接尾辞が結合した形式から派生されるもの(接辞強調形: バタナリ → バッター)と、反復形から派生されるもの(反復強調形: ピカピカ → ピッカピカ)とがある。本稿では当面前者について考察し、第6節において後者にも言及する。
- 2) Tateishi (1989) は、日本語のフットはモーラを単位とする二項構造をなし、語の終端から左方向にかけて構築されると考えている。
- 3) 「フーワリ」を適格と判断する話者もあろう。だが、「フーワリ」は「フンワリ」を基に起こる形だと考えられる。と言うのも、「フンワリ」の鼻音部分 /N/ はわたり音に前接するため明確な子音としての調音位置を持たず、ここで脱鼻音化が起きる可能性が高いからである。ここで重要なのは、「フーワリ」の一例だけでは反証の糧となり得ないこと、すなわちこれ以外の用例においては長母音形が依然として生産的でないことである。このため「フーワリ」が一部の話者に容認されるにしても、それは散発的な例外と捉えるべきだろう。

- 4) 論理的には、(12)において μ がVスロットを通過した後にVに結合すると考える方途もあろう。この説明ならば連結線の交差は起きない。しかし、その場合なぜCスロットが飛ばされるのが説明できない。
- 5) この主張の傍証を本稿最終節に挙げたので参照されたい。
- 6) 反対に、接尾辞的な特徴を示す接中辞もある。朝鮮語の部分反復現象では接中辞として現れる反復要素がベースの右端に近い位置に入る (Davis and Lee 1994)。

| | | |
|--------|------------|------------------|
| ベース | 派生形 | |
| culuk | culu-lu-k | 'dribbling' |
| t'alij | t'ali-li-ŋ | 'ting' |
| usu | usu-su | 'falling leaves' |

ただし、McCarthy and Prince (1996) によればこうした接尾辞タイプの接中辞は接頭辞タイプのものに比べると非常に僅かであるとされる。

- 7) 富山ほか(2001)は和語形容詞の強調形における促音生成の位置に関して、音声刺激を用いた実験および文字による刺激を用いた実験の二種類を同時に行っている。このうちHL構造が有意に選択されるのは後者においてだが、実験方法の間では有意差はなく、刺激のタイプによる干渉は起こらないとされている。
- 8) オノマトペでは分節現象においても左接性を伴うものがある。たとえばオノマトペに起こる有声化現象では語幹の左端の阻害音が優先的に有声化する。この現象では有声素性 [voice] が自律分節形態素として働くが、これが語幹の左から右にかけて結合対象を走査し、最初に出会った阻害音と連結することによって有声化が達成される (Mester and Itô 1989, Hamano 1998, 那須 1999b)。
- 9) 一般に、モーラ付加現象 (mora augmentation) では挿入された μ がどのタイプの分節と連結するかに関して有標性の差が見られる。たとえば Davis and Ueda (2002) によれば、日本語静岡方言での強調現象では重子音構造が無標である一方で長母音構造は有標性が高いことが明らかにされている。このほかケレイイ語のモーラ付加現象(18)においても長母音構造が現れない。長母音構造が忌避される理由について Samek-Lodovici (1994) は音節内でのソノリティ 遷移の関与を挙げ、核母音のソノリティが最大でその周縁のソノリティが相対的に下がる構造ほど無標であり、逆に周縁部のソノリティが核母音のそれと同等もしくはそれより上である構造は有標だとしている。これによると、核母音のソノリティが周辺部でもそのまま変わらない長母音構造は、音節構造としては有標な部類に属することになる。

参考文献

- Davis, Stuart and Jin-Seong Lee (1994) Infixal Reduplication in Korean Ideophones. In Akatsuka, Noriko (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 4. Stanford, CA: CSLI Publications, 447-460.
- Davis, Stuart, and Isao Ueda(2002)Mora Augmentation Process in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 18: 1-23.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio and Stanford, CA: CSLI.
- Hayes, Bruce (1989) Compensatory Lengthening in Moraic Phonology. *Linguistic Inquiry* 20: 253-306.
- Hohulin, Lou and Michael Kenstowicz (1979) Keley-i Phonology and Morphophonemics. *South-East Asian Linguistic Studies* 4: 241-254., Pacific Linguistics Series C, No.49, The Australian National University.
- Itô, Junko (1986) *Syllable Theory in Prosodic Phonology*. Ph.D. diss., University of Massachusetts. Reproduced by GLSA, 1990.
- Itô, Junko (1989) A Prosodic Theory of Epenthesis. *Natural Language and Linguistic Theory* 7: 217-259.
- Itô, Junko (1990) Prosodic Minimality in Japanese. *CLS* 26-2:213-239.
- Itô, Junko, Yoshihisa Kitagawa and Armin Mester (1996) Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot. *JEAL* 5: 217-294.
- 窪園晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』東京：くろしお出版。

- Kubozono, Haruo (1997) Lexical Markedness and Variation: A Nonderivational Account of Japanese Compound Accent. *WCCFL* 15: 273-287.
- Lombardi, Linda and John McCarthy (1991) Prosodic Circumscription in Choctaw Morphology. *Phonology* 8: 37-71.
- McCarthy, John and Alan Prince (1993) Generalized Alignment. In Booij, G. and J. van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1993*, Dordrecht: Kluwer, 79-153.
- McCarthy, John and Alan Prince (1996) *Prosodic Morphology* 1986. ms., University of Massachusetts, Amherst and Rutgers University, New Brunswick.
- Mester, Armin and Junko Itô (1989) Feature Predictability and Underspecification: Palatal Prosody in Japanese Mimetics. *Language* 65: 258-293.
- 那須昭夫 (1999a) 「重複形オノマトベの強調形態と有標性」『日本語・日本文化研究』9: 13-25. (大阪外国語大学日本語講座)
- 那須昭夫 (1999b) 「オノマトベにおける有声化と [p] の有標性」『音声研究』3-3: 52-66.
- 那須昭夫 (2002) 「日本語オノマトベの語形成と韻律構造」博士学位論文、筑波大学.
- Poser, William (1990) Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.
- Samek-Lodivici, Vieri (1994) A Unified Analysis of Crosslinguistic Morphological Gemination. *Proceedings of CONSOLE I*, The Hague: Holland Academic Graphics, 265-283. [ROA-149 at Rutgers Optimality Archive, <http://roa.rutgers.edu/>]
- Steriade, Donca (1982) *Greek Prosodies and the Nature of Syllabification*. Ph.D. diss., MIT, Cambridge, MA.
- Tateishi, Koichi (1989) Theoretical Implications of the Japanese Musician's Language. *WCCFL* 8: 384-398.
- 富山仁郎・広重真人・荒木健治・柄内香次 (2001) 「促音の挿入による形容詞の強調の傾向分析」『日本音響学会講演論文集』2001-1: 411-412.

(なす あきお 大阪外国語大学外国語学部)